

災害より見た中世鎌倉の町

福島金治

The Medieval Town of Kamakura Viewed from the Perspective of Disasters

はじめに

- ① 災害の記憶と被災の状況
- ② 火災よりみた鎌倉の町
- ③ 災害の復興と鎌倉住人
おわりに

【論文要旨】

鎌倉の都市的発展は、御所や御家人の屋敷・寺地・商業地域・墓所の立地等を含め、文献・考古両面から詳細な研究が行われてきたが、災害に注目して検討されることが少なかった。本稿では、火災・地震の発生とそれへの対応、復旧について検討した。

度重なる火災に襲われた鎌倉の防火システムをみると、若宮大路が防火帯として機能し、家屋破壊も防火の手段であった。また、「大焼亡」と認識され記録された大火災は、市中を大規模に焼失させる大火災と鎌倉の重要施設である寺社・将軍・北条邸の焼亡を含む火災があった。後者が「大焼亡」と認識されたのは、特に經典・聖教類を喪失することが鎌倉全体の凶兆と忌まれた結果であり、特に幕府上層部に危機感をあえたのである。また、地震発生とともに谷に開まれた鎌倉では山崩れが多く発生したが、復興の際は「犯土」という土地神を鎮める信仰故か、生埋者の救出や地曳に陰陽師や真言僧が深く関与した。また、地震は社会不安の発生と結合するのだが、鎌倉

では和田合戦をはじめ地震発生により兵乱が発生することが幾度か確認できる。その典型例は永仁元（一二九三）年の大地震の渦中に発生した平頼綱の乱である。この事件は、地震のなかで偶発的に起った事件と解釈されることが多いが、得宗北条貞時の衰日克服と連関して引き起こされた可能性がある。いわば、地震後の内乱発生の予防的措置とも考えられる。

最後に、町の復興を考えた場合、わずかな事例だが円覚寺では門前居住の「在地之人共」に在家の負担を決めて作道などの工事を行ったことがうかがえる。寺社・御家人ごとの復興作業が基底にあって、全般的な都市鎌倉の復興がなされたとみられる。